

## 今年『レ・ミゼラブル』と『三銃士』の舞台へ

古希から1年目。今年の「名作の旅」は夏に『レ・ミゼラブル』と『三銃士』の舞台フランスを予定しています。どちらも世界的によく知られた作品ですが、私にも個人的な強い訪問動機がありました。

『レ・ミゼラブル』は、信州の片田舎の中学1年生だったとき、学芸会（文化祭）で3年生がその劇を演じたのです。銀の食器を盗んだジャン・ヴァルジャンを追い詰めるジャベール警視に対して「それは私が差し上げたものなのですよ」と言うミリエル司教の言葉と情景が今も鮮明に浮かんでくるのです。その後、東京に出てきて働くようになってから、皇居のお堀前の帝国劇場でミュージカルを鑑賞しました。さすがに圧巻のプロの舞台でしたが、なぜか中学時代の体育館の粗末な舞台の方が強く印象に残っています。



同じく中学時代に私が本を読むきっかけを作ってくれた作品が『三銃士』でした。2年生のとき学校図書館で借りた少年向けの本がめっぼう面白かった。ガスコーニュの田舎から花のパリに出てきた主人公ダルタニアンが、腕の立つ3人の剣士と胸のすくような活躍をする。日本的に言えばいわゆるチャンバラ劇ですが、当時の少年を血沸き肉踊らせたものでした。

木造のオンボロ校舎。2階廊下の突き当たり奥にあった縦8m、横5mほどの小さな図書館の本棚には、全部合わせても500冊に満たない本が並び、そこに放課後の夕陽が差し込んでいた情景まで思い出されてきます。

あれから半世紀余り。つい3カ月ほど前に地元の映画館で「3D映画『三銃士』」が上映されましたが、あまりにもエンターテインメントに凝り過ぎ、原作の面白さに欠けていたような気がします。やはり、文学作品は翻訳であっても原作にしかず。これから再度、物語を読みながら取材のポイントを探り出そうとしているところです。もし、この随想をお読みになって、何かアドバイスをいただける方がおりましたら幸甚です。

7年前に始めた世界文学紀行も10作を超えてきましたが、旅の面白さは作品の舞台だけでなく、どこに行っても思わぬ出会いやエピソードに遭遇することです。昨年の『戦争と平和』『罪と罰』という少々お堅い作品の旅の先々では、ハッとするような美しいジュンブライド(6月の花嫁)に出会い、10組以上のカップルの写真を撮ってきました。『ハムレット』の舞台の取材で一昨年訪れたデンマークでは、アンデルセン博物館の前で「私たちが撮って！」と可愛い女子高校生たちが私のカメラの前に集合したのです。3年前のエジプト・ギザのピラミッド前ではスイスからの高校生たちが「どちらが高い!？」と4



段の“人間ピラミッド”を作っている瞬間をキャッチ。作品は地元の写真展でも話題となりました。

今年どんなハプニングやエピソードに遭遇できるか？ そんな期待と楽しみを胸に、ふだんはシルバー人材センターや現役時代の職場などで一生懸命に働きその旅費を蓄えているところです。